

研究発表もうしこみフォーム

氏名：包宝海（BAO BAOHAI）

所属：東京外国語大学大学院総合国際学研究科特別研究員・中国青海師範大学法学与社会学学院副教授（Special researcher, Graduate school of global studies Tokyo University of Foreign Studies. Associate professor, school of law and sociology Qinghai Normal University）

発表のタイトル：内モンゴルにおけるトクトホの記憶と表象

本報告は、「反開墾の英雄」とされるトクトホ（*Toqtaqu*, 1863–1922、漢語表記は陶克陶胡／陶克陶乎 [Tao Ke Tao Hu]）を事例として、内モンゴルにおける集合的記憶の動態を考察するものである。「集合的記憶」は、端的に言って、「集団の記憶（*mémoire du groupe*）」なのである。つまり、「集団」というエージェントが、「過去」の出来事、客体、人物、さらに当の集団を巡って、「現在」において、想起する」あるいは「思い出す」ところのイメージ、印象、感覚、そして、観念である」（小野道邦、2011：90–100頁）。

トクトホは1907年から1910年まで、内モンゴル東部地域で、漢人の農地開墾に反対して武装蜂起を起こし、その後ロシアに避難し、1911年のモンゴルの独立運動にも関与した有名な人物である。

内モンゴルにおけるトクトホに関する先行研究や、各資料の記述では、トクトホが「開墾に反対し、清朝の統治階級と封建的勢力と戦った」という点で合意が見られるが、時代によって、「反開墾の英雄」、「匪賊」、「祖国の裏切り者」など、その評価も異なっている。一方、モンゴルにおける歴史叙述では、彼が「中国（漢人）の圧迫と入植に反対し、モンゴル人の独立のために戦ったナショナリスト」と評価されている。従来のトクトホ研究は文書資料に基づいた実証主義的歴史研究とウリゲルト・ドー『トクトホ』を主な分析の対象とした文学的、芸術的研究がその多くを占めてきた。しかし、集合的記憶論の視点から、内モンゴルにおけるトクトホの記憶の根源や、その形成、受容と変容の過程は論じていない。

本報告では、トクトホに関する人びとの語りやウリゲルト・ドー、ホーリン・ウリゲルなどの口承文芸の分析を通じて、内モンゴルにおけるトクトホの「英雄の語り」の根源、集合的記憶の形成と変容を考察する。また、トクトホに関する文学作品や「トー・ローエの谷（*Tao Laoye-yin jilay-a*）」などの記念空間を手かがりとして、内モンゴルにおけるトクトホの記憶と表象の問題を検討してみたい。